

# 環日本海経済圏の構造と意義

——文化論的地平において——

The Structure and the Meaning of  
the “Economic Areas Surrounding the Sea of Japan”

——From a Cultural Perspective——

金 田 一 郎

Ichiro Kaneda

## —— 目 次 ——

|     |                            |    |
|-----|----------------------------|----|
| I   | 序 .....                    | 3  |
| II  | 環日本海経済圏の歴史的、国際的位置づけ .....  | 4  |
| III | 環日本海経済圏の文化的基盤の特徴           |    |
|     | ——ECの文化的基盤との比較において—— ..... | 6  |
|     | (1) 民族・言語に関して .....        | 6  |
|     | (2) 思想・芸術に関して .....        | 9  |
|     | (3) 宗教に関して .....           | 13 |
|     | (4) 法律・制度に関して .....        | 14 |
|     | (5) 人種に関して .....           | 16 |
| IV  | 環日本海経済圏の構造 .....           | 19 |
|     | (1) 文化に関して .....           | 19 |
|     | (2) 経済に関して .....           | 22 |
|     | (3) 経済圏の空間的性格に関して .....    | 23 |
|     | (4) 経済圏の規模を画するもの .....     | 24 |
| V   | 結 語 .....                  | 27 |

## I 序

現在、「環日本海経済圏」という言葉は、日本海沿岸地域において将来の発展を導く理念としての意味合いが強くなってきたように思われる。

筆者自身も、この10年間「環日本海経済圏」という概念を自分なりに抱き続けてきた。始めは漠然と考えていたが、「環日本海経済圏の研究」ということを新しい大学（新潟産業大学）を設立するための研究・教育上の理念として考え、昭和58年（1983年）4月以降地元の地間等に公表<sup>1)</sup>してから改めてその意味を深く考えてみるようになった。そのポジティブな意義は、「環太平洋」では国家間協力が想定されているのに対して、「環日本海経済圏」という形で国家を超えて地域間協力が考えられないか、ということであった。地域間協力である限り、「帝国主義の再現」に対する懸念は除かれようし、又環（loop）構造であることで、中心国家や中心地域を作る気遣いもない、すなわち一極集中を惹き起こす可能性も小さい、と考えられた。

しかし、例えばEC（ヨーロッパ共同体）の場合には、それはヘレニズム、ヘブライズ、ローマニズム<sup>2)</sup>（ローマニズムの最大の特徴は、システム思考の時代的先取り、そして構成力、総合性にあろう。ヘレニズムの分析性に対して、その点を強調したい）という共通の文化的基盤を有し、一つの文化圏を形作っている西欧社会が背景にある。だからこそ夙にクーデンホーフ・カレルギー（Coudenhove-Kalergi）<sup>3)</sup>の欧州統合の思想も芽生えたわけである。それに対して、環日本海経済圏は、そのような共通の文化的基盤を持たず、果してどの程度一つのまとまったシステムとして機能しうるのか、疑問であった。特に当時は、ロシアも現在とは体制が異なり、昭和58年（1983年）9月には大韓航空機撃墜事件が起こったことも重なって、なおさら確信が揺らいだ。

現在は、環日本海経済圏の旗印のもとに予想以上に経済交流が盛んになりつつある。ただ、共通の文化的基盤のない状態においてビジネス先行で事が進んだ場合、永続性が疑われると同時に、将来マイナス面の出てくることも予想される。環日本海経済圏の健全な発展のためにも、この辺でその意義と可能性を

改めて考えてみる必要があるかと思う。

環日本海経済圏についての研究は未だ緒に就いたばかりであり、業績が蓄積され学問的体系が構築されるのはこれからである。現在、学術レベルの著書としては、筆者の知る範囲では、新潟大学グループのものがある<sup>4)</sup>。敬意を表したい。ここで、筆者も如上の意義と可能性について、一つの考察を試みたい。

## II 環日本海経済圏の歴史的、国際的位置づけ

最近、国際政治学の分野では、以前の勢力均衡論に代って「相互依存論」が盛んになりつつある。社会科学上の理論は時代の傾向を反映している場合が多いが、これも現在の国際的な傾向を反映しているものと思われる。環日本海経済圏の考え方が時代にマッチした背景には、この相互依存の考え方が強くなってきたという事実があるようである。

「相互依存」に類似した考え方は、過去にも存在した。特に1930年代の不況の時代に支配的であったブロック経済の考え方とそれに基づく経済ブロックの出現が想起される。それは、当時の列強による植民地支配の中で、主としてヨーロッパの宗主国とその植民地の間に、またアメリカとその勢力下にあったアメリカ大陸諸国の間で結成された。やがて、それに対抗して、持たざる国の間にもナチスの Lebensraum（そこからナチス的地政学が生まれた）や日本の大東亜共栄圏の思想が出現した。結果は、周知のように第二次世界大戦の勃発につながっていった。

当時のブロック経済の考え方と現在の相互依存の考え方の違いは、どこに求められるであろうか。

30年代の不況の時代の経済ブロックは、宗主国がその利益の確保のために植民地を支配下に置く形のブロック形成に基づくものであり、ブロック内の相互依存といってもそれすら名目に過ぎず、必ずしも植民地の利益になるものではなかった。宗主国は、生産のための資源の確保と生産物＝商品の販路の確保を

第一の目的としていた。アメリカとその勢力下にあったアメリカ大陸諸国の間でも、事情はほぼ同様であった。宗主国等と植民地等の間には、現在一般に考えられている意味の「相互依存」の考え方は認められない。

また、持てる国たる列強と持たざる国たる列強（日本、ドイツ、イタリア）との間には協力態勢はなく、持てる国の間でも、持たざる国における「ファシズム」の動きを共通の危機として意識するようになるまでは相互の協力関係は希薄であった。国際連盟という国際的な組織はあったが、十分な機能は発揮しえなかった。各経済ブロックがサブシステムとして世界システムの中に有機的に組み込まれている、という態勢ではなかったのである。ゲーム理論的に言うならば、基本的には、持てる国、持たざる国（持たざる国も局地的「侵略」によってある程度のブロックを形成した。例えば、ドイツのオーストリア併合、ズデーテン進駐、日本の満州支配などである）を問わず、列強の間のブロックの強化及び緩和を戦略とする非協力ゲームが行われたと解釈することができる。しかも、一般にはゼロ・サムを含む定和ではなく変動和非協力ゲームであったと考えられる。従って、一般にはゲームの均衡点が最良の解になりにくいケースであった<sup>5)</sup>。

そのような状況の中で、持たざる国は、持てる国の制裁に抗して「侵略」政策を拡大し、ついに全面戦争というカタストロフィー（catastrophe 理論の）<sup>6)</sup>に至ったと解することができる。

最近の相互依存論を背景とする「環日本海経済圏」は、宗主国と植民地という関係、ないしそれに類似の関係によるものではなく、国家又はその一部分を対等の構成員として成り立つものである。30年代の経済ブロックは事実上宗主国一国の利益と意思に基づいて行動したが、環日本海経済圏は、対等の構成員の総意に基づいて行動することになる（更に経済圏の形成が進んだ場合）。ゲーム理論的に言うならば、圏内においては、圏内の物質的、人的資源の利用、情報の交換等をめぐっての構成員による協力ゲームが行われるのであり、経済圏そのものが一つの強固な閉じた排他的な存在となって行動する可能性は小さいと思われる。しかも、経済圏を構成すると思われる諸地域の中で、少なくとも

ロシアの極東南部地域、中国の東北部は、ロシア、中国という国家の一部としてその規制も受けているわけであり、構成員が、直接には国ではなく国に属する地域であるということが、該経済圏が排他的な方向に向かう可能性をなおさら抑止する働きをもつこととなる。また、特に日本に関しては、環日本海経済圏に属するのが国そのものであるというよりも直接には日本の環日本海地域であるということが、いわゆる「日本帝国」に係る「覇権」<sup>7)</sup>のイメージを減殺することとなる。それが、例えばECなどとも大きく事情の違う点であり、この経済圏の一つの特徴であるとも言える。

環日本海経済圏はまた、共通の文化的基盤をもたないという点でECなどとも大きく異なる。ECは、国家そのものの連合体である上にいわゆるヘレニズム、ヘブライズム、そしてローマニズムという二千年近くに亘って受継いできた共通の文化的基盤をもち、その点でも環日本海経済圏とは本質的に異なっている。

環日本海経済圏が一つの共通の文化的基盤をもたないということは、経済圏を形成する上でいかなるプラス効果、マイナス効果をもつかは別として、その一つの特徴であることは認めざるをえない。

次のⅢで、環日本海経済圏と文化的に大きく異なるECを採り上げ、両者の文化比較の中で環日本海経済圏の文化的基盤の特徴を明らかにしたい。先進国の関わる経済圏としては、ECとの比較が最も適当であると考えられる。

### Ⅲ 環日本海経済圏の文化的基盤の特徴

#### —ECの文化的基盤との比較において—

#### (1) 民族・言語に関して

まず当然の事ながら、民族と人種を峻別しておく必要がある。すなわち、「人種」は自然人類学上の概念であって人間の生物学的、遺伝的形質に関わるものであり、その見地から分類される。それに対して、「民族」については文

化的要素の中でも特に比較言語学上の言語の系統が重要な意味をもつ。特に言語に注目する理由は、それが思想、芸術、制度などに比べて明確であり、変りにくいからである。

ECに属する12か国（フランス、ドイツ、イタリア、ベネルクス3国、イギリス、アイルランド、デンマーク、ギリシャ、スペイン、ポルトガル）の公用語は、比較言語学上すべて例外なくインド・ヨーロッパ語族（Indo-European family）に属する。細かく分ければ、フランス語（フランス、ベルギー、ルクセンブルクの公用語）、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語はイタリック語派のロマンス諸語（俗ラテン語より分化）に、ドイツ語（ドイツ、ルクセンブルクの公用語）、オランダ語、英語、デンマーク語はゲルマン語派（前三者は西方ゲルマン語、後一者は北方ゲルマン語）、アイルランド語はケルト語派に属する。ギリシャ語は、勿論インド・ヨーロッパ語族に属するが、それらの語派とは別である。

インド・ヨーロッパ語族の内部では、語派の違いはあっても、基本的な語彙の間には規則的な音韻対応が見られ<sup>8)</sup>、文法体系も類似しており、互いに他の言語の習得が容易である。従って、bilingual, trilingualも珍しくない。その点、日本語や「朝鮮語」（日本における言語学上の通常用語）と関係の深いアルタイ語族とは事情が大きく異なる。中世、近世のヨーロッパにおいて学問や外交の分野で同じインド・ヨーロッパ語族に属するラテン語（フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語にとっては共通の祖語である）が公用語として用いられたり、主としてヨーロッパでの通用を念頭に置いて、いくつかのヨーロッパ語に基づいてエスペラント語がつけられたこともうなづける。スペイン人とポルトガル人、ドイツ人（特に低地ドイツ語方言地域の）とオランダ人の間では、極く簡単な日常会話ならば、互いに自国語で話し合ってもある程度意思が通じる程である。

EC圏内において、日常会話程度であれば互いに他の言語を簡単な学習によって習得できるということは、一般民衆のレベルで言語の壁が低く、意思の疎通が可能であるということであり、交易、観光、その他の場合の人的交流を

考えても一つの経済圏の形成にとって非常に有利な条件である。

言語に関する事情では、環日本海経済圏はこれと大きく異なる。

中国語は日本語や朝鮮語とは全く系統の異なるシナ・チベット語族に、ロシア語はインド・ヨーロッパ語族のスラヴ語派に属する。日本語と朝鮮語は、アルタイ語族（近年は、アルタイ語とウラル語の違いの大きいことが判ってきたので、言語学的にはウラル・アルタイ語族という言い方はしない）と関係が深い、アルタイ語族に属するとは簡単には言い切れない<sup>9)</sup>。そもそも、アルタイ語族自体、インド・ヨーロッパ語族と同じ意味で「語族」と言い切れるかは疑問である。それはむしろ、モンゴル語、トルコ語、ツングース語、満州語（中国語の東北方言とは別で広義のツングース語に属する）などから成る語群（部分的な共通性をもった）と言うべきである、というのが最近の通常の見方である。

日本語と朝鮮語も、両者に共通であるところの漢語を除けば、言語学的な厳格なチェックに堪えうる、基本的語彙の一致は意外に少なく、一般に考えられているほど互いに近縁ではない（インド・ヨーロッパ語族におけると同様の意味で日本語と同系であると言える言語は沖縄語しかない）。また、語順の一致などは、言語の系統を定める上で比較言語上あまり大きな意味をもたない。辛うじて、日本と韓国・朝鮮とが共に漢語を導入したことが、日本人、中国人、韓国・朝鮮人の間で互いに他の言語を学習する上での便宜を与えている。但し、現代中国語の標準音である北京音は、日本の漢字音のもととなった六朝時代や隋・唐の音、及び韓国・朝鮮の漢字音のものと主体となった北宋音からかなり乖離している。その乖離の度合いは、例えば現代広東語の音などと比べても著しい。

言語の系統が違うことは、圏内における相互の外国語学習を困難にする。言語の系統の違いは、基本的な語彙の一致が少ないことを意味するだけでなく、表現方法や発想の違いの大きいことも意味している。この発想の違いは、更に相互のものの考え方の違いにもつながり、各民族を相互に隔てる一つの壁となる。



環日本海経済圏は、言語に関してECとは大きく条件が違っている。その点だけでもECにおける意味での強い共同体の形成は難しいように思われる。しかし、相互にある程度の隔てのあることは、マイナス面ばかりであるとは限らない。

## (2) 思想・芸術に関して

先にも触れたが、ECを含む西欧社会は、ヘレニズム、ヘブライズム、そしてローマニズムを共通の文化的要素として受け継いできた。

まず、ヘレニズムの大きな特徴は学問と芸術にある。

学問におけるその特徴は、学問を技術、そして実用性から切り離して純粹に発展させたことにある。例えば、幾何学は、エジプトのナイル川の流域にその濫觴を求めることができるが、エジプトでは実用の範囲でしかその発展を見ることができなかつた。世界の文明史上他に先駆けていくつかの発明を成し遂げた中国の例を見ても分るが、エジプトに限らずそれがむしろ普通であったのかも知れない。異例であり、偶然の事であったと言えるが、ギリシャ人は幾何学を実用から切り離して純粹な学問の形で発展させた。その過程で「論理」が意識され、論理の体系が構築された。この論理の体系が、本当の意味での学問を色々な分野に成立させることとなった。この方法が後に西欧においてルネサンスの一環として復活し、近世・近代の科学・技術を生み出した。実用に係わる技術の発展という点で言うならば、この方法はまさに知 (*ἐπιστήμη*) の迂回生産の利を発揮したものと言えよう。それは、ヘレニズムの科学精神としての面であり、西欧における共通の精神的基盤となっている。

ところで、この科学精神によって生み出された科学・技術は、人類にとって普遍性をもつものとしてその精神とともに現代世界の隅々にまで広がっている。一方、環日本海経済圏の諸国は、いずれもある程度の文明、文化の発展段階にある。従って、この精神は、環日本海経済圏の中では、社会的な滲透の度合いは西欧世界ほどではないにしても、ある程度互いに共通のものとしても享受されているものと思われる。その点、環日本海経済圏としては、共通の一つの文

化的基盤を他から与えられたことになる。この科学精神は、学問の分野だけでなく、日常生活における普遍的、合理的なものの考え方として機能している。

さて、芸術におけるヘレニズムはどうであろうか。

ギリシャの芸術の本領は、やはり美術、それも彫刻にあるであろう。それと文学とである。

ギリシャの音楽の源流はオリエントにあり、ギリシャ人は音楽芸術そのものでは学問におけるほどの創造性は発揮しなかったが、テトラコルド (Tetrachord)<sup>10)</sup> を基本としてかなりの音楽理論を発展させた。しかし、単旋律の段階に止まり、和声法や対位法の発展は見られなかった。しかも、その遺産はローマには正しく受け継がれず、後の西欧世界に与えた影響はそれほど大きくはない (音楽と結びついた演劇は別)。

ギリシャの美術と文学は、ルネサンスの時代に復活し、それ以後テーゼ又はアンティテーゼとして西欧の芸術の発展に大きな影響を与え、学問の分野におけるほどではないにしても、西欧の芸術の共通の基盤の形成に与った。それは、更に西欧人のある程度共通な美的感覚の形成にも基盤を提供した。この美的感覚は、現代において工業美術、商業美術にも関連して (特に Bauhaus の試みやアール・ヌーヴォー、アール・デコの流行以後) 経済的に大きな意味をもつようになった。

なお、西欧の音楽は、ヘレニズムとは直接関係なく、世界的に珍しくメリスマ (melisma) の少ない明快な音の組み合わせと対位法、和声法に基づく共通の音楽的基盤を発展させた。

さて、環日本海経済圏の芸術はどうであろうか。美術、工芸の面では、日本、韓国・朝鮮は言うまでもなく中国の影響を強く受けている。と言うよりも、その文化圏に入ると言う方が妥当であろう。従って、その三国の国民の間には基本的に共通の美的感覚がある、と言ってよいであろう。

それに対して、ロシアは、美術、工芸の面ではビザンチン文化の影響を強く受けている。ビザンチン文化は、系譜的にはヘレニズム文化を直接的に継承するものであるが、美術、工芸に関しては、モザイク、イコン、ミニアチュアと

いった絵画、及び建築における独特の円蓋などに見られるように、独自のものを形成した。

日本、中国、韓国・朝鮮、ロシアは、ともに西欧近代美術を導入し、それを共通のものとしてもっているが、美的感覚は、多分に深層の文化的基盤に根差していると思われる。その文化的基盤は、日本、中国、韓国・朝鮮とロシアとは質的に違うわけである。その違いは、工業美術、商業美術、それに関する規格化の問題にも関わるという形で経済的に意味をもってくる。例えば、圏内全体に共通な画一的なデザインの採用は難しい、というような形で問題が出てくる可能性がある。

音楽についても、環日本海経済圏諸国はいずれもヨーロッパ音楽を導入しており、その限りにおいて共通のものをもっていると言える。しかし、深層にあるものは必ずしも同じではない。確かに日本、中国、韓国・朝鮮の場合、基層に雅楽（中国唐代の宮廷宴饗音楽。中国古代の宗教音楽としての本来の雅楽とは別）、及び声明などの仏教音楽（特に日本の場合）がある。日本の場合、黒田節などの俗謡も例の越天楽に起源をもっている。しかし、越天楽は、最も日本化された（中国の同名の楽とは別に日本で作られたという説もある）雅楽であり、最も雅楽らしからぬ雅楽である。また、中国音楽は、中・近世以後日本音楽とはかなり違う方向に発展した。更に韓国・朝鮮の曲には3拍子のものが多いが、日本の曲にはそれが殆どないなどの違いがある。

一方、ロシア音楽は、勿論、日本、中国、韓国・朝鮮の音楽とはかなり違う。それらに比べると、はるかに西欧的な色彩が強い。しかし、それはピョートル大帝以後の西欧化策による外装であって、深層にあるものは、非西欧的、中央・西アジア的要素（例えば五音音階<sup>11)</sup>、ヘテロフォニー（Heterophonie）<sup>12)</sup>など）、次にビザンチン的な要素である。この中央・西アジアの音楽は、雅楽を介して日本の音楽の源流にもつながっている。

ただ、ロシアの古い音楽と、雅楽を含む日本の伝統音楽の間に旋律や旋律型の共通性が認められるわけではない。飽くまでアジア音楽の共通の祖型が想定される程度である。

また、日本音楽は、雅楽より更に深層では古い北アジアの音楽につながっている可能性もある（沖縄音楽は南洋の音楽とのつながりが強い）。日本の追分けに酷似した曲節がモンゴル音楽の中にあることが最近注目されている。雅楽以前の大和歌、久米歌、東遊、催馬楽などのルーツについての研究もこれから更に進められるであろう。

環日本海経済圏諸国の音楽は、互いに相違点も多いが共通の層も認められ、複雑な重層構造が形成されており、西欧のように事情が単純ではない。音楽は、商業的、興業的な形で経済に関わりをもつであろう。

\* \* \*

芸術に関して、最後にローマニズムとの関係で建築について触れておかなければならない。

ヨーロッパの建築の基本は石造であり、その住文化は「石の文化」である、というイメージが一般に強いが、一概に始めからそうであったとも言い切れない。石の文化は、主としてローマの住文化に由来するものであり、ゲルマン民族やスラヴ民族の住文化は本来はむしろ木の文化であったと言うべきであろう。

同じ石造建築でも、ギリシャの神殿建築などは<sup>まぐさ</sup>楣式であったが、ローマ時代に、エトルリア人から学んだと思われるアーチの技術によって石造建築が発達した。ゲルマン民族やスラヴ民族は、後からそれを学び、徐々に木の文化から石の文化に移行したのである。従って、ゲルマン民族やスラヴ民族の住文化、住感覚の根底にあるものは、木の文化であると言える。

環日本海圏については、日本、中国、韓国・朝鮮の建築の基本は木造であり（中国の宮殿建築の骨組みも木材から成っている）、先に言及した事でも判るように、スラブ民族の一派であるロシア人の住文化、住感覚の深層にも当然木の文化があると思われる（例の特徴あるドーム建築は、後にビザンチン文化の一環としてロシアに伝わったものである。また、クレムリン宮殿も当初は木造建築であったほどである）。その事は、環日本海圏の住環境の整備、住宅産業の方向を考える上で考慮すべき点である。

### (3) 宗教に関して

EC圏内における宗教は基本的にローマ・カトリック教（旧教）とプロテスタント（新教）である。細かく言えば、ローマ・カトリックは、フランス、イタリア、ベルギー、スペイン、ポルトガル、アイルランド、ドイツ南部で優勢であり、プロテスタントは多くの宗派に分かれるが、大きく言って、ドイツではルター派が、フランス、オランダ、スコットランドではカルヴァン派が、イギリスでは英国国教会派（アングリカン・チャーチ）が盛んである。ただ、ギリシャではロシアと同じくギリシャ正教が盛んである。ローマ・カトリック教徒とプロテスタントは、歴史的に多くの抗争を繰り返してきたが、現在は互いに同じキリスト教徒という連帯の意識が強くなっている。ただ、それらとギリシャ正教との間では事情が違うようである。日露戦争の際のポーツマス講和会議において、アメリカ国民が、異教徒の国である日本よりも同じキリスト教国であるロシアに対して必ずしも好意的であったとは言えない理由も、その辺にあったように思われる。しかし、日常的な物の考え方、表現の仕方などは、互いに共通性が多い。大局的には、EC諸国の人々は、キリスト教精神＝ヘブライズムを共通の精神的基盤としていると言えよう。

環日本海経済圏諸国の場合、日本、中国、韓国・朝鮮は、儒教、仏教、道教を共通の精神的基盤としてもっている。もっとも、中国、北朝鮮の場合は40年間共産政権の支配が続き、また韓国では第二次大戦後キリスト教がかなり普及したことにより、事情が変ってきている。

本来、儒教の滲透の度合いも、日本と中国、韓国・朝鮮の間では微妙な違いがある。例えば、葬制について、日本では火葬が一般的であるが、中国、韓国では土葬が一般的であり（中国では、少なくとも共産政権の支配以前はそうであった）、その違いは、一般に指摘されるように、仏教と儒教の滲透の度合いの違いによるようである。更に、日本人の宗教意識の根底には神道があり、それが生活の色々な面を規定している点も、中国や韓国・朝鮮と異なる。

ロシアにおける宗教は、ギリシャ正教の系譜であるロシア正教が主体である。同じキリスト教の中でも、ギリシャ正教はローマ・カトリックに比べると知性

より精神性を重んずる傾向が強い<sup>13)</sup>。また、ロシア人の宗教意識の根底には、キリスト教が入る以前の土着の信仰、雷神ペルンを始め自然神崇拝の痕跡が残っている<sup>14)</sup>。西欧の場合にも、キリスト教信仰の中に、やはりキリスト教が入る以前の土着信仰の名残が認められないわけではない。しかし、ロシアの場合はその名残がはるかに強いように思われる。ロシア人の土に対する愛着、グリンカやムソルグスキーなどの音楽に認められるスラヴ的な感情は、この宗教感情と関係あるように思われる。

宗教的感情は、意識の深層で人の物の感じ方・考え方、生活態度に関わっている。更に、文化の構造に関わっている。人は、宗教的感情のコンテクストの中で物を感じ、考え、行動すると言ってよい。日本人は、一見不信心のように見えるが、意識の深層ではかなり強い宗教感情が認められることが多い。そして、それぞれの宗教は独自の記号体系とコードをもって日常生活の行動パターンの形成に関わっていると考えられる。

環日本海経済圏諸国の民族は、EC内の民族に比べて物の考え方、感じ方、行動の仕方についてははるかに多様性があるが、その一つの原因は宗教の多様性にあると思われる。

#### (4) 法律・制度に関して

西欧の法律制度の基本（主に私法の分野であるが）はローマ法（特にユスティニアヌス法典 *corpus juris civilis*）とそれに基づくナポレオン法典に求めることができる。中世の長い間、このローマ法、そして一部ゲルマン法（例えば *Gewere* の概念など）が行われてきた<sup>15)</sup>。従って、ECの諸民族の法律的な物の考え方には、かなり共通性があると思われる（大陸法とアングロサクソン法とといったような違いはあるが）。又、ECを含む西欧の社会は、遅速の差はあっても大体19世紀中頃までに市民革命と産業革命を経験した。従って体制、制度、社会的習慣の面で均一性がある。

ロシアの法律制度の基本は、本来西欧のそれと同じであったが、1917年の11月革命によってそれから切断された。しかし、現在はそれに復帰しつつある。

一方、モンゴル支配の時代に受けたモンゴルの制度の影響も無視できない。

バトゥ、ジュチによって創められたキプチャク汗国（後に、カザン、クリミア、アストラカンの3汗国がそれから独立した）を初めとするモンゴル政権は、ロシア人に対して間接統治を行ったが、それだけに制度面にはよく配慮した。特に、徴税制度、人口調査制度、駅伝制度の整備に努めた。現在でもその関係のモンゴル・トルコ（モンゴル・チュルク）語起源の単語がロシア語の語彙の中に見られる<sup>16)</sup>（支配者であるモンゴル人の数は、被支配者の数に比べて非常に少なく、次第に支配下にいたトルコ系民族の文化の影響を受けてトルコ化していった。元々モンゴル語とトルコ語は同じアルタイ語族に属する）。モンゴルの制度の影響は、モスクワ政権になってからも長くロシア社会の中に残った。ロシア社会に認められる西欧諸国とは異質のアジア型専制の要素も、よく指摘されるようにこのモンゴルの支配制度に由来するものが多いようである。

次に、ロシアで共産政権が70数年続く間に、市場経済の制度、手続、慣習についての社会的記憶が失われた（共産政権の支配が40数年の中国と違う点である）ことは、経済改革を遅らせる最も大きな原因になっている。

日本、韓国・朝鮮は、早い時代に中国の法律・制度を採り入れた。日本では、大化の改新の時に本格的に中国の唐の制度を採り入れ、国情に合った形で律令制度を作った。この制度は、王朝時代を過ぎてからも、形式的には明治初年まで存続した。現在でも、省庁の名称、叙位制度などにその名残を見ることがができる。又、律令制度との関連で、或いは別途移入された中国の制度、行事、習慣との関連で形成された有職故実は、日本人の生活の深層に関わっている。

日本では、大化の改新の時に税制、戸籍計帳（税制との関連が強い）、駅伝の制度が律令体制の一環として整備されたが、先に触れたロシア社会に影響を与えたモンゴルの制度との関連が注目される。両者の源流は当然中国の制度にあるだろうが、色々な歴史的事情から、ロシアの社会には、西欧諸国と違って、日本、中国、韓国・朝鮮と共通な要素もある程度認められるのである。

一方、日本は、アジア諸国の中では例外的であるが、かなり西欧の封建制度に近い歴史段階を経過し、経験した。皮肉な事に、その制度が経済史的な意味

で確立したのは、西欧の Grundherrschaft に少なくとも表面的には類似した「荘園制度」が崩壊した後の織田・豊臣政権の成立の時期であり、当初から絶対主義的傾向が強かったことなどから西欧の例に単純に比定できない面もあるが、とにかく日本では封建制度と言いうるものが成立したわけである（中国でも宋の時代の「佃戸」による荘園耕作の形態が封建制に近いと言われるが、十分とは言えない）。日本が、近代に至る前にアジア型専制の段階を脱して封建制を経験したことは、社会体制を、「自由」を尊重する近代国家のそれに一步近づけたことであり、後に近代化をスムーズに行いえた一つの大きな理由であろうかと思う。

現在では、環日本海経済圏に属する国々はいずれも西欧の法律制度を採り入れているが、制度の深層にある要素は、互いに類似しているもの、異なるものがあり、それらが複雑に錯綜している。それらの要素が、法律・制度感覚、日常感覚、商慣習、行動様式を規定している面があり、互いの交流、交渉、交易に関してその事に配慮すべきであろう。又、ビューロクラシーやコネなどの人間関係の形成、社会組織などについてのそれぞれの特徴にも配慮すべきである。韓国の「本貫」<sup>17)</sup>の制度に対する理解の不足が大きな失敗を招いた例も多い。

##### (5) 人種に関して

文化的比較の最後に人種の問題について触れておきたい。

先にも触れたように、「人種」は自然人類学上の概念であり、人間の先天的、遺伝的形質によって分類される。それに対して「民族」は、人が後天的に受け継ぐところの文化に関する概念であり、固有の文化、特に言語によって分類される。因みに、最近多用されている英語の 'ethnic' はギリシャ語の ἔθνικός ← ἔθνος に由来し、民族に関する意味合いが強い。

人種そのものは文化的概念ではないが、それはしばしば文化的現象にも関わり、人に対する見方についての様々な偏見（いわば「負の文化」）を形成する。記号論的に言えば「過剰コード化」<sup>18)</sup>である。そして、先天的なものとは後天的なものに関していよいよ混乱をもたらす。かくして、文化的現象は、人間の遺



伝的、先天的なものに由来するという偏見が生まれる。意味の転化である。

素朴な人種分類、人種の類似性・遠近についての見方は、人種の身体上の特徴による換喩的すり替えによっている場合が多い。例えば、肌の色でモンゴロイド（黄色人種）とネグロイド（黒色人種）を有色人種としていっしょくたにする見方はその最たるものである。視点を変えれば別の分類が可能になる。例えば、髪が真直か曲っているかに着目すれば、コーカソイド（白人、白色人種）とネグロイド（黒人、黒色人種）は言わば曲毛人種という同じグループに、モンゴロイド（黄人、黄色人種）は言わば直毛人種という、それとは別のグループに分類されることになる。通俗的な人種分類はナンセンスな人為分類である。因みに、自然人類学自体がもっと分子生物学的なレベルにまで進まなければならない。

環日本海経済圏の人種構成について、一応現在の自然人類学上の概念で見ることにする。

言うまでもなく、日本、中国、韓国・朝鮮の国民の大部分はモンゴロイドである。ただ中国の新疆ウイグル自治区にはコーカソイド的な特徴をもった人々が分布している。

ロシアの国民の大部分はコーカソイドであるが、極東地方のヤクート族、ブリヤート族、ギリヤーク族など（それ自体は本来民族的な分類である）は大率モンゴロイドに属する。ヤクート族の属する「トルコ（チュルク）族」は、トルコ語系統の言語を話すという意味での民族上の概念であるが、地理的には欧亜にまたがっており、西の果てはトルコ共和国の国民の大部分を占める民族であり、東の果てはヤクート族である。同じトルコ族でも、人種的には、トルコ共和国の国民の大部分を始め西方ではコーカソイドの特徴が強くなり、東方ではモンゴロイドの特徴が強くなる。トルコ族のほか、ブリヤート族、ギリヤーク族など、ロシア極東地方の少数民族は大体モンゴロイド的な特徴が強い。

中国東北部にも、少数民族と言われる満州族、ツングース族、モンゴル族が分布している。それらは、民族的には互いに異なるが、人種的にはすべてモンゴロイドである（満州語、ツングース語、モンゴル語はアルタイ語族に属す

る)。前述のように、トルコ族は、大局的に見れば民族としては同一であるが、人種的にはモンゴロイドからコーカソイドに亘っており、それと対照的である。因みに、同じ中国に分布する新疆ウイグル自治区のウイグル族はトルコ族でありながらコーカソイド的な特徴が強い。

結局、環日本海経済圏では、ロシア民族だけがコーカソイドに属し、ほかの民族はモンゴロイドに属する。

ロシア民族は、歴史的にモンゴロイドとの接触の機会が多かったが、数百年に亘ってモンゴルの支配下にあったことなどによって、他のヨーロッパ人に比べてモンゴロイドに対する感情はかなり複雑なようである。概して、親近感と嫌悪感が混在している。また、多くのヨーロッパ人は、多かれ少なかれモンゴロイドに対して恐怖感（例えば黄禍論 *gelbe Gefahr*）があるが、ロシア民族の場合は、その感情と親近感が併存しているように思われる。「韃靼の軛（*татарское иго*）」ということが言われるが、モンゴル帝国は、税の徴収のほかは被征服民族に対して宗教面、文化面で比較的寛容であった。また、モスクワ朝は、ビザンチン帝国を継承すること以上に、モンゴル帝国を継承するスタイルをとった形跡がある<sup>19)</sup>。モスクワ朝の宮廷には、モンゴル貴族、またモンゴルの血を引く貴族がかなりいたようである。トゥルゲーニェフもモンゴルの血を引く貴族の出であった。表現主義的、抽象的シュールレアリストの画家、カンディンスキーは、モンゴル貴族の血を引いていたことを非常に誇りにしていたと言われる。確かに、彼の絵画のモチーフの中には、モンゴル風の文様を思わせる形象が見られる。

EC諸国の本来の諸民族はすべてコーカソイドに属する。従って、本来民族問題はあっても人種問題はなかった。しかし、近年中近東、アジアからの労働力の移入によって、本来の民族と移住者との間の軋轢が起こっている。もっとも、中近東の諸民族は大部分がヨーロッパ人と同じコーカソイドである。ヨーロッパ人が彼等を非コーカソイドと見るのは、アーリアンに対するセムという民族的な違いと人種的な違いを混同した結果によるものである。その意味で、これは疑似人種問題、偽人種問題であって、本質は民族問題である。因みに、

トルコがECへの加盟に歓迎されない理由の根底にはこの疑似人種問題があるように思われる。あながち、イスラム教とキリスト教という宗教の違いが大きい理由ではない。それに対して、一頃ロシアのECへの接近と加盟の可能性に対して示されたEC側の反応の中に一種の親近感が見られたことは、自分達とロシア人とが同じコーカソイドに属するという確信があったからかも知れない。

環日本海経済圏では、モンゴロイドに属する日本人、中国人、韓国・朝鮮人に対して、コーカソイドに属するロシア人が対置されるが、先に触れたようなロシア人とモンゴロイドとの間の歴史的事情を考えながら両者間の親近感を伸ばす努力が必要であろう。

#### IV 環日本海経済圏の構造

##### (1) 文化に関して

以上に、環日本海経済圏とECとの文化的比較を行った。総じて、ECには強固な共通の文化的基盤があるのに対して、環日本海経済圏諸国の場合は、互いに共通の文化的要素もあるが、共通の文化的基盤が形成されるには至っていない。また今後も、それが簡単に形成されるといった状況ではない。その意味では、「多様性」<sup>20)</sup>が一つの特徴と言えよう。

一般に、近隣の国家ないし地域が一つの経済圏を構築しようとする場合、これらの国家ないし地域の文化が互いに同質でなく多様であるということは、プラスであろうか、マイナスであろうか。一概には断じ難いが、事柄を分けて考察してみると、問題の性質が比較的明確になってくる。

まず、ある圏内における文化の多様性は、異なる文化をもった集団が隣接し交流する上では、文化自体にプラスの効果をもたらすと考えてよいであろう。互いに己にない文化的要素を必要に応じて取捨選択し採り入れることが出来るというだけでも、自身の文化を豊かにすることになる。

それは静態についての事であるが、更に動態について言うと、文化の発展に

とつても圏内の文化の多様性はプラスに作用するであろう。外来の異なる文化的要素が契機となって本来の文化的要素との協働の中で別の新しい文化的要素を生み、文化全体を一層豊かにすることになろう。例えば、我が平安朝の「国風文化」の形成も、漢文化の移入が契機となっている。それに、恐らく渤海国からの刺激もあったことであろう。

ただ、一時的に外国との交渉を断った場合（例えば鎖国）、独自の文化が醸成されることがある。平安朝の国風文化も、江戸文化もそうであった。現在では、外国との交渉を断つというようなことはあり得ないが、外来文化に全面的に依存せず固有の文化のアイデンティティを保持する努力が必要であろう。それがあつた限り、圏内の文化の多様性は、文化そのものにとってプラスである。

しかし、文化の共通の基盤を求める場合は、国家・地域の圏としての集合の外延をどこまで広げるかについて、文化の同一性、類似性ということが一応その範囲を画する条件と基準になるが、文化の多様性を求める場合は、それ自体としては文化的交流の範囲を画する条件、基準はない。従つて、究極的には、その範囲は世界全体に広げるべきだ、ということにもなろう。ただ、地理的、経済的な関係を考えれば、ある範囲に限られてくる可能性はある。その意味で、結果として文化交流圏が自ら形成される可能性はあるが、それは謂うなれば Sollen の問題とは次元の異なることである。広い意味の Sollen の見地から言えば、地理的、経済的条件の許す限り文化交流圏の範囲をどこまでも広げるべきだ、ということになろう。それに関わる事柄は、normative な見地からの研究の対象となろう。地理的、経済的に文化交流圏の範囲がどこまで広がらうかは、Sein の問題であり、その意味では Müssen の問題でもある。それは positive な研究の対象となろう。

文化に関する場合を含めて、人の交流にはまた別の要素が関わってくる。ここで、記号論における二項体系 (système binaire)<sup>21)</sup> の視点から交流圏を考察してみる (人間の「認識」は、アナログをデジタルに写像、ないし変換するものと思われる)。交流圏内の文化の多様性と同質性の2つが、親しみと反発、好奇と飽きといった2対の相対立する人間感情にどのように作用するかを考え

てみる。

圏内の文化が同質であると互いに親しみを感じるのであろうが、一方互いに他に対する飽きを来す。文化が多様であり互いに異質であると、互いに他に対する好奇心は湧くであろうが、一方互いに他に対する反発の感情をもたらす。交流に対して、親しみと好奇はプラスに働くが、反発と飽きはマイナスに働く。交流にとって最も望ましい状態は、一般に完全な同質性と極端な多様性の間に存在すると思われる（端点に存在する場合もありうる）。すなわち、全体として適度に多様性のある状態である、ということになる。中間の状態を考えることは、二項体系的な把握からの敷衍であり、二次的な帰結と言えよう。

以下にこれを数式で表現する。

〔記号〕

$x$  : 地域間の親しみ

$y$  : 地域間の好奇心

$z$  : 圏内の交流の度合い

$t$  : 圏内の文化の多様性の度合い

$$x = f(t) \quad (1)$$

$$y = \phi(t) \quad (2)$$

$$z = F(x, y) \quad (3)$$

(1)、(2)、(3)より

$$\frac{dz}{dt} = \frac{\partial z}{\partial x} \cdot \frac{dx}{dt} + \frac{\partial z}{\partial y} \cdot \frac{dy}{dt} \quad (4)$$

事柄の性質上

$$\frac{dx}{dt} < 0, \frac{dy}{dt} > 0, \frac{\partial z}{\partial x} > 0, \frac{\partial z}{\partial y} > 0 \quad (5)$$

$$\frac{d^2 z}{d t^2} < 0 \text{ であるとすれば}$$

$$\max(z), \text{ 従って } \frac{d z}{d t} = 0 \text{ より}$$

$$\frac{\partial z}{\partial y} \cdot \frac{d y}{d t} = - \frac{\partial z}{\partial x} \cdot \frac{d x}{d t} \quad (> 0) \quad (6)$$

$x, y, z, t$  は多変量解析（因子分析、主成分分析）によって具体的に捉えることができるが、それについての分析は後日に委ねたい。

一般に、交流圏の範囲が拡がると多様性が増すと考えられる。多様性が増すと、構成員相互の親しみは減じて反発は強くなるが、一方、互いに他に対する好奇心は強くなる、という傾向があると考えられる。それによって、交流の度合いは初めの段階では増大し、やがて減少に転ずる（ $\frac{d^2 z}{d t^2} < 0$  と仮定）。範囲に対して逡増する費用を仮定すると、その傾向は尚更強くなる。

このパターンだとすると、環日本海経済圏の文化交流の度合いの強さはその範囲の大小に従って適当に増減し、もし圏内の人々が文化交流の盛んになることを求めているとすれば、その範囲は、交流の強さの度合いが極大化する状態において画されることとなる。

ECのように圏内の文化が同質の場合は、上述の多様性による文化交流の利益は求められないが、共同体を構築するには有利である。共同体が構築されれば、後述するように単一の市場形成が可能であり、その市場の機能も十分に発揮されるという利点がある。

いずれにせよ、経済は文化的背景や文化的基盤によって規定される面がある。

## (2) 経済に関して

次に、文化的多様性、同質性が経済にプラスに働くかマイナスに働くかについて考察してみたい。それは一概には断じ難いが、これも事柄を分けて考えて

みると明確になってくる。ここでは、経済について市場の要素と交易の要素を採り上げて考えてみることにしたい。

市場の形成と機能に関しては、文化の同質性はプラスに働き、多様性はマイナスに働くものと思われる。具体的にいえば、取引の制度・慣行、すなわち交渉の方法、商品の受渡し、決済・支払い方法の制度・慣行、契約の方法、また税制、商品規格化の方法（嗜好が類似している場合は規格化し易い）、更に言語——などは、文化又は文化の一部と深く関わっており、それらが同一であるか又は類似しているということは、一つの共通の市場の形成とその機能を高めることに資するのである。

共通の文化的基盤をもつECはその点で有利であり、文化が多様な環日本海経済圏はその点で不利であると言わざるを得ない。

交易についてはどうであろうか。

交易の方法、商品の規格化の方法などは市場の制度・慣習の範疇に属するが、交易の対象となる商品については改めて考慮の要がある。

商品について、先ず耐久消費財も含めて通常の日用品の生産、流通には一般に画一性が求められよう。その点に関しては文化の同質性がプラスに働くであろう。それに対して、工芸品や、デザインが重視されている商品（装飾品、贅沢品、家具など）に対しては、珍しいもの、己にないものが求められる傾向があり、その点では文化の多様性がプラスになる場合も多いであろう。

全体としては、やはり文化の多様性より同一性の方が市場経済にとっては有利であり、その面では、環日本海経済圏は、ECに比べて市場経済システム、市場経済構造としては不利である、と言わざるを得ない。

### (3) 経済圏の空間的性格に関して

環日本海経済圏の特徴は、まず第一に冒頭に触れたように国家の連合ではなく地域の結合であり、その意味で覇権に対する警戒心を減殺し、互いの経済協力をし易くする。

次に、該経済圏の形状が環（loop）になっていて、地理的に中心の位置を占

める構成員がないことは互いの経済協力をし易くする条件となる。経済協力の対象は、共通の市場の形成だけでなく、合併事業、共同資源開発、国境を超えた経済コンビナートの構築などが含まれる。数学的分析の発表は後日に譲るが、空間経済学的見地からは、環日本海経済圏はECに比べて有利であると言えよう。

なお、環構造としては「環地中海経済圏」も考えられるが、北岸のキリスト教と南岸のイスラム教の対立が協力態勢を組む上での阻害要因になっている。

キリスト教、ユダヤ教とイスラム教とはかなり共通の要素があり、またキリスト教、ユダヤ教を生んだイスラエル人は、イスラム教を生んだアラビア人と同じセム族に属する。イスラエル人のヘブライ語とアラビア人のアラビア語は同じセム語族に属するのである。このように、文化の類似性が時に反発要因となることもあるが、それは歴史的コンテクストの中で解説さるべきものである。

また、最近「環黄海経済圏」なる概念も提唱されている<sup>22)</sup>が、環日本海経済圏と併せるとかなり地中海の広さに近くなり、その場合、韓・朝鮮半島はアナロジカルにイタリア半島の地中海における位置、状況に似てくる。そのシステム的な分析も後日に譲りたい。因みに、比喩、アナロジーは、システム的な、あるいはシステムの類似性に基づく等置、置換と考えられる。必ずしも、比喩は証明にならぬ、として一蹴さるべきものでもない。

#### (4) 経済圏の規模を画するもの

最近、環日本海経済圏の範囲をどこまで拡げて考えるべきか、といった論議がなされつつある。それは、重要な問題ではあるが、なかなか答えの出しにくい問題である。

該経済圏を極く狭く解すれば文字通り日本海に接する地域ということになり、構成員は日本、韓国・朝鮮、ロシアの日本海沿岸地域ということになる。その日本海沿岸地域も、海岸線から何キロ以内をとるかといったことも問題となる。

該経済圏をもう少し拡げて、河川も海につながりであり延長であると考えたと、日本海に注ぐ豆満江の流域を含んでいることによって中国東北部も圏内に



加えられる。その場合、豆満江のもつ国際河川としての意義と役割は大きくなる。もっとも中国の場合は、日本海からの距離をある程度十分にとれば、それだけで圏内に入りうる（それには、北朝鮮又はロシアの一部を通過しうることが前提となる）。又、最近言われている「環黄海経済圏」を加えれば、中国も名実共に同一圏内に入り、この問題は解決する。

それでは、経済圏はどこまで広げるべきであろうか。

隣接地域を次々に加えていくという発想だけであると、歯止めがなくどこまでも広がっていく可能性がある。中国の東北部以外の地域、モンゴル、チベット、また同じモンゴル系ということでバイカル湖周辺のブリヤート自治共和国、新疆省のウイグル族と同じトルコ系だということでロシア極東地方北部のヤクート自治共和国、カザーフ共和国（カザーフ Kazakh, Kazakh はカザーク Kazak, Kazak（いわゆるコサック）とは全く別）……と、どこまでも広がっていく可能性がある。どこで止めるという決め手がないわけである。

ここで観点を変えて、経済圏全体に関するパレート最適性（Paretian optimum）を考えてみる。諸構成員の中の任意の二者は変動和協力ゲームを行うものと考えれば（「結託」はないものとする）、二者の間にNashの交渉解が得られる<sup>23)</sup>。この解はパレート最適を充たす。今、参加構成員全体について上述の意味のパレート最適が充たされていて、そこに新たに他の地域が参加するものとする。その場合、参加の可能な条件は、既参加の構成員全体にプラスの利得が追加されうることである。ここに、パレート最適が充たされているという条件のもとに、参加地域と圏全体の社会的所得との関係について社会的価値生産関数を想定し（本来は、まず社会的厚生関数（social welfare function）<sup>24)</sup>を想定すべきであるが、自動的に資源の適正配分がなされ、パレート最適が達成されるものとしてこのように想定した）、追加参加地域について圏全体の社会的所得への寄与の限界値がプラスである限り新参加がなされ（限界値の大きい地域から新参加させていく）、その値がマイナスに転ずる直前で新参加が止む。すなわち、圏全体の所得の増大に寄与する限りは参加が続くということである（新参加によって既参加構成員の間の価値、利得の分配方法は変らないものと

する)。それによって、構成員のHomo oeconomicusとしての行動から環日本海経済圏の適正な範囲が帰結され、画定される。

それを以下に数式で表現する。

〔記号〕

$m$  : 地域 (国)

$x_m$  :  $m$ の経済圏内における戦略

( $m = 1, \dots, n$ )

$\bar{x}_m$  : 経済圏に参加し経済圏内のパレート最適が達成されたときの $m$ の戦略

( $m = 1, \dots, n$ )

$v_m$  :  $m$ の〔社会的〕所得 (経済圏に参加しない状態の)

( $m = 1, \dots, n$ )

$\bar{v}_m$  : 経済圏に参加し経済圏内のパレート最適が達成されたときの $m$ の所得

( $m = 1, \dots, n$ )

$V_m$  : 経済圏全体の所得

( $m = 1, \dots, n$ )

$\bar{V}_m$  : パレート最適が達成されたときの経済圏全体の所得

( $m = 1, \dots, n$ )

$F_m$  : 写像ないし関数

$$\bar{V}_m = F_m (\bar{x}_1, \dots, \bar{x}_n) \quad (1)$$

$$\bar{v}_m > v_m \quad (2)$$

$$\bar{V}_m = \sum_{r=1}^m \bar{v}_r > \sum_{r=1}^m v_r \quad (3)$$

$$\bar{V}_{m+1} > \bar{V}_m + v_{m+1} \quad (4)$$

(4)が成立する限り経済圏の拡大 (新参加) が行われる。

$$\bar{V}_{m+1} < \bar{V}_m + v_{m+1} \quad (5)$$

となるとき、 $m$ が最後の参加国となり、それが、経済的意味での最適規模を示す。

なお、当然、既参加者、新参加者の双方にインセンティブが必要なので、

$$\bar{V}_{m+1} - \bar{V}_m > \bar{v}_{m+1} > v_{m+1} \quad (6)$$

が成り立っている。

構成員が Homo oeconomicus という想定である限り、以上の分析は、positive な意味と normative な意味を併せもつことになる。

## V 結 語

少なくとも現在の段階において、環日本海経済圏は、文化が多様であり、EC のように一つのまとまった文化圏を形成しているとは言い難い。従って、自己完結的な単一の市場経済システムとしての、経済圏の形成も難しい。

しかし、その事をむしろ逆手に取って発展の方向を考えることもできる。

第一には、文化の多様性への対応の仕方によっては、交流が盛んになり、それが、環 (loop) を維持するためのある程度の接着剤の働きをすることとなる。

次に、環がゆるい結合、ゆるい共同であること、即ち柔構造であることによって、排他的な閉じたシステムではなく、開放的な開いたシステムとして機能しうる。システムとしての柔軟性から、それは、環東シナ海地域、環オホーツク海地域、更には環太平洋地域にも連結する可能性をもっている。その事によって、アメリカ、カナダ、オーストラリアの側から見ても、環日本海経済圏の地政学的な意義はいよいよ大きくなるものと思われる。

このように、環 (ループ、リング) の連結という形で、環日本海経済圏の発展の方向を考えることが可能かと思う。ループの延長、連鎖 (チェーン) を考えれば、それは世界システムの分節であるが、分節によるサブシステムがうまく機能すれば、世界システム全体もうまく機能しえよう。

EC が強固な連邦となり (謂わば剛構造)、圏内における民族同志の混住が進んだ場合、内部的には、旧ソ連邦のように将来改めて民族紛争が惹起される恐れもある。外部的にも、世界システムの中の特異点として全体との調和がう

まくいかなくなる（例えば、経済ブロック化）恐れもある。その点、環日本海経済圏は、国家を本来の形で残しながら、しかも全体との調和の中でうまく機能するものと思われる。

その環日本海経済圏の規模は、当面Ⅲの(1)による範囲( $S_1$ )とⅢの(4)による範囲( $S_2$ )の合併( $S_1 \cup S_2$ )を最大限として画定される。それがⅢよりの帰結である。

\* \* \*

新潟産業大学では、1992年度より「環日本海経済論」を開講し、筆者がそれを担当している。本稿は、併せてそのためのレジュメの意味も兼ねている。

1992年6月

〔注〕

- 1) 柏崎日報「顔」, 昭和58年(1983)4月7日, 4ページ; リクルート進学タイムズ「視点」昭和58年(1983年9月12日), 1ページ。  
後者の紙面に筆者の言として、「……体制の違いを超えて、日本、ソ連、韓国、中国などの国々の、日本海を取り巻く地域を結合して、いわば『環日本海経済圏』といったものが考えられないかというのが、将来にかける私の一つの夢でもある。……余りにも大き過ぎる『環太平洋』よりは『環日本海』の方が、はるかに現実性が高いように思うのである。」
- 2) 西欧文化の形成に関して専らヘレニズムとヘブライズムが強調されるが、建築、法律・制度に関して発揮されたローマ人の創造性は改めて評価されるべきである。また、ローマ人の総合性、構成力によって初めて、ヘレニズムとヘブライズムの融合が可能となった、と言える。
- 3) Coudenhove-Kalergi, R. N., "Paneuropa", 1923.
- 4) 多賀秀敏編「国境を越える実験——環日本海の構想——」有信堂, 1992.
- 5) 両者間に取引交渉が行われる場合（例えば、ズデーテン問題をめぐっての1933年のミュンヘン会談）は、ナッシュの意味の解が得られる。

cf. Nash, J. F., "The Bargaining Problem", *Econometrica*, April, 1950, pp.155-162.

6) 恐れと怒りをコントロール平面とし、攻撃と退去を垂直軸とする楔形カタストロフィーが考えられる。

Zeeman, E. C. "Catastrophe Theory" (Selected Papers 1972-1977), Addison-Wesley Publishing Company, Inc., Massachusetts, 1977, pp.6-7, 18-19, 103-105, 329-333.

7) 環日本海圏に関して、ほかにもこの語の用例がある。例えば、若月章「環日本海をめぐる構造の歴史」多賀秀敏編，前掲書，49ページ。

8) 高津春繁「比較言語学」岩波書店，1950，39ページ以下参照。

9) アルタイ語の特徴である母音調和の現象などが、日本語、朝鮮語については十分実証されていない。また、それらの言語とアルタイ諸語との間で語彙の一致が少ない。

10) 古代ギリシャの音楽において、4個の音が4度音程の中で一組になっている音組織。

11) ロシアの民族音楽の中に、全音階的な五音音階が認められる。「音楽辞典」5，平凡社，1968，3451ページ。

12) 原旋律とその装飾的変形旋律の同時的結合。スラヴの民族歌唱に特徴的である。同書，2802ページ。

13) 高橋保行「ロシア精神の源」中央公論社，1990，48ページ。

14) 同書，5，31ページ。

15) 船田享一「ローマ法」第1巻，1983，498ページ以下。

16) тамга > таможенник (税関吏)。деньги (金銭)。ямщик (駅馬車、荷馬車の御者。また郵便配達人)。

17) 始祖の出自を明らかにした系譜。本貫を同じくする男女の婚姻は法律で禁じられている。我国でも、律令時代に類似のものがあつた。

18) U. エーコ (池上嘉彦訳)「記号論」1，岩波書店，1984，214-218ページ。

- 19) 山内昌之「ラディカル・ヒストリー」, 中央公論社, 1991, 63ページ。
- 20) 多賀秀敏「環日本海圏の創出」, 多賀秀敏編, 前掲書, 22ページ。
- 21) ジョリオ・C・レプスキー (菅田茂昭訳)「構造主義の言語学」, 1979, 91—92ページ参照。
- 22) 「環日本海交流圏新潟国際フォーラム'92」(新潟市, 1992年2月7—8日) におくる某氏の報告の中から。
- 23) Nash, J. F., *op. cit.*, pp.155—162.
- 24) バーグマン・サミュエルソン型の社会的厚生関数。  
Samuelson, P. A., “Foundations of Economic Analysis”, Cambridge, Harvard Univ. Press, 1948, p.221.